

日本歴史地理学の方法論は いかに進展しているか

菊地利夫

- I. この講演の課題
- II. 学会創立ころの歴史地理学の動向と背景
 - (1) 終戦後の状況
 - (2) 伝統的な地理学は社会激変期に役立つ科学であるか
 - (3) マルクス地理学の提唱と新理論地理学の流行
 - (4) そのころの世界には科学革命の旋風が吹きまくっていた
- III. 百花齊放の歴史地理学方法論の展開
 - (1) 実証主義的方法と人文主義的方法の発達
 - (2) 地理学史にみる人文主義的方法と実証主義的方法の発展
 - (3) 地理学の革命から人文主義的方法と実証主義的方法の発達
- IV. 研究者の方法論はいかに変わっているか
 - (1) 緩慢な変化
 - (2) パラダイム転換の形態
- V. 私の歴史地理学界に対する希望

I. この講演の課題

本年は歴史地理学会の創立から40年目にあたります。すなわち1958年4月29日に日本歴史地理研究会は創立されました。その会場は東京の日本大学でありました。1966年に日本歴史地理研究会は、その名称を改めて、歴史地理学会としました。創立当時の会員数は百数十名でありましたが、現在は700名近くに増加しています。日本における歴史地理研究者

の大部分が会員となっています。これらの会員が40年にわたって歴史地理学を研究してきましたので、日本の歴史地理学は世界において屈指の高い水準に達しています。

創立40周年記念大会が、1997年5月17-19日に九州の佐賀大学にて開催され、その記念特別発表の一つとして、私が「日本歴史地理学の方法論の進展」について講演することになりました。この内容を次の三点にまとめて申し上げます。

1, 歴史地理学会の創立したころ、歴史地理学や人文地理学の動向や背景はいかなるものであったか。

2, 過去四十年間において、世界や日本の歴史地理学方法論に革命的变化がいかにあらわれたか。

3, 日本の歴史地理研究者の方法論はいかに変化しつつあるか。この変化の進行に対する阻害条件はなにか

4, 私の歴史地理学界に対する希望

本論を申し上げる前に、世界や日本における学会創立について見ていきたいと思います。一般的に世界において、学会の組織は総合的学会から専門別学会へ分化していく傾向があります。世界の国々をみれば、はじめは歴史地理部門や人文地理部門や自然地理部門などが共同して融合的な地理学会を結成していました。しかしながらこの数十年間に歴史地理学だけの独立した専門別学会を創立する動向が現れています。このように独立することが

できるのは、その学問分野の研究者数が激増すること、すなわち歴史地理学が興味深い学問として発達していることが主因であります。日本の歴史地理学会は世界の国々にさきがけて創立されました。それは1958年でありました。つづいて1968年にチェコスロバキヤに、歴史地理学会が創立されました。それはソ連支配から脱し、マルクス地理学から解放されたからであります。1971年にアメリカ合衆国に、1975年にイギリスとアメリカ合衆国が共同して歴史地理学会を創立しました。米国では70年代に歴史地理ブームが発生し、A・A・A・Gの会員の約10%に当る610名が歴史地理研究者であったと報告されています。さらに1979年に中国が、1983年にオランダが歴史地理学会を創立しました。このような動向は日本と同じような理由がこれらの国々にも発生したからであります。

日本において歴史地理学会が創立されたところに、日本地理学会のほかにさまざまな地理学会が創立されたことに注目しなければなりません。京都大学を中心とした人文地理学会や東北大学を中心とした東北地理学会が創立されました。また専門別学会として経済地理学会や政治地理学会や地理教育学会が創立されました。さらに日本都市学会や国際地図学会が創立されました。かゝる動向は歴史地理学会の創立と同じような背景と理由があったからであります。

II. 学会創立ころの歴史地理学の

動向と背景

(1) 終戦後の状況

歴史地理学会の創立に活躍した会員は今も在世するならば、90才代から80才代の高齢者でありましょう。私も当年80歳でありますから、これらの会員は私と同じ境遇にあったと思います。話の内容が多分に私の自分史のようになりますが、私を当時の世代の代表として私の状況について申し上げます。太平洋戦

争は、1945年に日本の無条件降伏で終わりました。その翌年に、私は南太平洋のソロモン群島の戦場から復員しました。当時の会員の多くは戦場の生き残りでした。私が祖国にたどりついてみれば、国土は潰滅して無惨な焼野原となっていました。

開戦したころは、私は東京文理科大学の地理学専攻の学生でありました。日米戦争は緒戦に日本が勝っても、米軍の反攻がはじまると、その進撃路における致る所の戦場で日本軍は全滅して、戦況は不利でありました。政府・軍部は戦場で闘う下級指揮官が不足するので、全国の大学生の修業年限を短縮して卒業させ、大学生を戦場に送りました。私は海軍予備学生に採用され、砲術科将校の訓練をうけ、米軍の進撃路に当たるソロモン群島のブーゲンビル島の海軍要塞に配置されました。ここで米軍の進撃をくいとめるべく、3ヶ年間に米軍海兵隊と戦闘をしました。この戦場では海軍部隊約2万5千名の75%が戦死・病死しました。この戦闘のあげくの果に無条件降伏でありましたから、身も心も打ちのめされてしまいました。

復員してからは、生活資金をうるために教員になることを決心して、占領軍の実施する教員資格審査を千葉県で受け、はじめは中学校教諭となり、翌年に千葉師範学校に配置転換されました。これから地理科教員として地理学の研究と教育の道を歩みはじめました。はじめは経済地理的研究をして地理学評論や雑誌「新地理」などに投稿をしていました。ひまがあれば、房総半島の各地を歩いて教材採訪をしていました。この小旅行の中で私が歴史地理研究へ転換する時点に遭遇しました。

ある日の夕刻、下総台地の端に立てば、眼下にひろがる大干拓地がありました。三方は台地に囲まれ、一方は太平洋に面し、おからの夕日に映じた金色の霧が干拓地にたなびいていました。これが面積5千町歩におよぶ世に言う「干潟八万石」でありました。その

景観は安土桃山時代の屏風絵さながらでありました。この光景を眺めつつ、私は新田開発の研究をしようと思い立ちました。その時に過去に成立した地理的事実を研究する学問は歴史地理学であり、大学在学中に隔年講義2単位を取得したことを思い出しました。

それから東京の都立図書館から歴史地理学という書籍を借り出して、歴史地理学の理論を深め、かたわら関東地方の新田開発とその旧家を探ねて開発文書を写しとり、夜店で買った「三体千字文」の助けを借りて近世文書の解説をつづけました。他方では、北の北海道から南の沖縄列島まで新田開発をした旧藩・旧家を探ねて現地調査と資料採訪をしました。全国にわたって数十ヶ所の新田を臨地調査して、開発文書を筆写しました。こうして新田開発の本質と意義を理解できるまでに約八ヶ年は必要でありました。それから二ヶ年の執筆によって「新田開発の歴史地理的研究」の一卷を完成しました。

このときに当って驚いたことは、日本にも世界にも歴史地理学の理論を体系的に論じた著書はなく、歴史地理学の理論は未成熟の段階にあることでした。日本にはたゞ一冊の「歴史地理学」小牧実繁著が岩波講座の中にあっただけでした。歴史地理学の本質論、復原理論、研究方法論、叙述理論などはあまり発達していませんでした。私の新田開発論を展開するために、伝統的な地域性叙述を採用すれば、数十の新田開発の特色を列挙して、その末尾に類型的把握をして終わることになり、それでは満足できません。さりとてそのころ流行しはじめた新理論地理学の計量主義の抽象的な理論叙述では物足りなさを感じます。そのとき学生時代の哲学ゼミナールに参加して講読したドイツの詩人ゲーテの著書「植物変態論」(1790年)の理論を思い出しました。私の学生時代の日本哲学界は個・類型・普遍についてその本質と関係を共通課題としていました。ゲーテの中心理論は変型(メタモル

フォーゼ)と原型(ウルティプス)との関係を論じていました。樹木は幹・枝・葉・花・根などの異なる形態の集合であるが、それらは幹を原型としている変型であると述べていました。この考え方をひろげて現実界をみれば、現実界にさまざまな事実が現れているが、それは変型であり、その背後にそれらを生みだしている原型があるととらえなおすことができます。そしてこの考え方は個から普遍に至る考察過程でもあります。これを叙述理論として「新田開発の歴史地理的研究」を書きあげました。この論文を東北大学の地理学教授の富田芳郎氏と歴史学教授の古田良一氏と地質学教授の横山万次郎氏に提出して、1957年に理学博士号を取得しました。翌年に古今書院から「新田開発」上下二巻として発行しました。

10年かかって一つの研究が終って、自分の周囲を改めて見廻す余裕ができました。見渡せば、世界は大変動をしていました。米国とソ連が超大国として世界を二分して支配する冷戦構造をつくっていました。朝鮮半島は南北二つの国にわかれ、アジア・アフリカの植民地はほとんどが独立国となり、敗戦した日本とドイツは世界の奇蹟といわれる経済発展をしていました。日本は内外ともに激変の最中でありました。世界各国の科学もまたこの激変の中で革新されていました。地理学の世界では、1955年から「地理学の革命」という合言葉が合唱されていました。この「地理学の革命」はアメリカ合衆国からはじまって世界の国々に及んでいきました。日本にも地理学の革命の波がおしよせていました。

(2) 伝統的な地理学は社会激変期に 役立つ科学であるか

「地理学の革命」とはなにか、なにをいかに変革しようとしていたのでしょうか。その相手とは地域の個性(地域性)を研究している地域地理学でありました。地域地理学は地

域の特色（地域性）を叙述するだけの研究であつて、地域の法則を定立しないから、未来予測の能力がない科学である。それ故に社会・経済の激変期に役立つ科学ではないと致命的な判定を下されました。さらに地域の特色（地域性）は時の断面上に静態的に明示されるが、時間の経過に従って別の特色（地域性）に変化するので、過去の地域資料となる。かくて地域地理学は過去の資料を山なすほどに蓄積しているのみであると批判されていました。さらに地域地理学の重要概念について多くの疑問や反対意見をつきつけられてしまいました。地域地理学は地域の特色を研究するために全体を地域区分します。いわゆるデカルトの還元主義であります。かように部分としての多くの地域を研究しても全体はわかりません。全体は部分の総和より大きいからであります。また地域と地域の境界の線引きをします。地域の境界は研究の結果として発見される実在であると主張しています。しかし地域とその境界は指標によって変わりますから、これらは実在ではなく、人為的に設定される研究上の手段ではないかと反論されています。1950年代には地域地理学は鼎の軽重を問われて大きく動揺し、学会の大会にも地誌的研究の発表者は姿を消していました。

この地域地理学はドイツのA・ヘットナー著「地理学・その歴史とその本質とその方法」（1927年）によって世界中に普及しました。さらに北米のヘットナーと言われたR・ハーツホーン著「地理学方法論—地理学の性格」（1939年）によって、地域地理学はアメリカ合衆国に盛んになり、アメリカ軍に占領されている日本においても、1940年代後半ころから地理学の主流となりました。戦後の日本の地理教育はもっぱら地域地理学を学習内容としてきました。この地域地理学は系統地理学と地誌学にわけます。歴史地理学も歴史系統地理学と歴史地誌学にわけます。両者の関係は地誌学・歴史地誌学は地理学の王冠である

と位置づけられています。系統地理学や歴史系統地理学は地域性を構築する過程において理論的に奉仕する関係にあるといわれます。

この地域地理学はドイツ西南学派（新カント学派）の哲学に支えられています。西南学派の科学分類によれば、個性記述の科学（文化科学）と法則定立の科学（自然科学）にわかれます。この科学分類によれば、地理学は歴史学とともに個性記述の科学（文化科学）となります。したがって地理学は「法則を生産する科学」ではなく、多くの他の科学が生産した法則を使用して地域性を説明する「法則を消費する科学」であると分類されます。それならば当時の地理学に法則を定立せよと要求したり、未来予測の能力がないと判断することは筋違いの議論であります。

もしそうであるならば、19世紀はじめにC・リッターやA・フンボルトが法則定立の科学として地理学を近代化して、それ以来百数十年にわたって続けてきた地理学の研究方法を地域地理学は大転換させたこととなります。この地域地理学の全盛期は1940年代をピークとして20—30年間も続きました。そして1950年代の地理学の革命において批判されました。地理学史からみれば、地域地理学は地理学本来の研究方向から別の方向へ寄り道をして脇道へそれたものであると言えます。今こそ未来予測の法則を生産する研究方向に戻るべきであるということになります。

(3) マルクス地理学の提唱と新理論 地理学の流行

1950年代になって伝統的地理学が未来予測する法則を生産する能力がないと判定されると、この地位にとって替わろうとして2つの地理学が提唱されました。それは「社会科学としての社会地理学」と「人間生態学」でありました。社会科学としての社会地理学は、従来の人文地理学が人間と環境との関係という膨大で漠然とした関係を研究しようとした

ことに対して、その研究範囲を縮小して、場所によって異なる人々の生産構造と生産関係を考察しようと主張しました。そして社会進化の段階にそれぞれの地域を位置づけようと提案しました。人間生態学は生物生態学の一分野として人間社会と環境との関係を遷移概念をもって説明しようとした。植物集団が生活形を変化させながら、土壤に適応した小規模の地方的群落からタイガや熱帯雨林のように地球をとりまく大規模な極相群落（気候群落）にまで拡大していく進化の概念を採用して人間集団の法則的發展をみようとした。この考え方は遊牧社会や農業社会に適応できますが、工業社会や情報社会への發展を生態学的な進化の法則をもって説明することは容易ではありません。「社会科学としての地理学」や「人間生態学」は唯物辯証法の論理と法則を利用したマルクス地理学でありました。マルクス地理学は日本には定着しませんでした。しかしソ連を中心として中国や東ヨーロッパなどのソ連圏にひろまりました。

1950年代になると、法則を立て、理論を構築する新理論地理学が北ヨーロッパや北米に發展して全世界にひろがり、日本にも流入してきました。この新理論地理学は地理的事象を数量に変えて計測し、分析するので計量主義地理学とも言われました。伝統的な個性記述する地域地理学が低迷している学界に法則と理論をふりかざして地理的事実を解明していくので、新理論地理学によって地理学の革命が激しく進行するだろうと思われました。それで計量革命とも言われました。

計量革命は社会科学では地理学より早く行われました。経済学では1930年代に数理経済学としてドイツにおいて完成し、日本にも普及しています。計量主義は1940年代には歴史地理学の歴史人口の研究や村高と人口との相関々係の研究などに使用されていました。しかし当時は地理的事象の個性記述のために使

用され、法則と理論の展開やモデル構築などの研究方向を示していませんでした。この方向は1950年代になってから出現し、地理学の革命の尖兵になりました。しかし地理学の革命は計量革命とまで言われましたが、それは革命の初期段階であり、その後に関々と新地理学の理論が出現して、歴史地理学も人文地理学も新しい發展をはじめました。

(4) そのころの世界には科学革命の旋風が吹きまくっていた

地理学の革命が進行していたころ、世界の科学一般に革命的な雰囲気のみながっていました。この結晶として1960年代にアメリカ合衆国から科学革命の理論が主張され、旋風のように世界全体を吹きまくりました。1962年にアメリカ合衆国の物理学者・科学史家のトーマス・クーン著「科学革命の構造」が発行され、この思想がたちまち全世界の学界・思想界・一般の産業社会にまで流行しました。そのピークは1970年代に達し、それから10年間も高原状態につづきました。この20年間にこの著の英語版は約50万部も売れ、世界の17ヶ国語に翻訳されて各国版が版を重ね、科学革命に関係する著書が世界中に千数百種類も出版され、日本でも60数種類の科学革命の書籍が書店の棚に並んでいました。これらは「クーン現象」といわれるブームでありました。アメリカ科学史学会は1982年、クーンが62才の時に学会賞を贈呈しました。

「科学革命の構造」の中心思想はなんでしょうか。科学革命とはパラダイムの転換であり、科学者集団が旧パラダイムから新パラダイムに転換して思考するようになることであると、クーンは主張しています。パラダイムとは一つの時代の支配的な物のみかた・考え方であり、あるいは科学の問題をとりあつかう前提であり、基礎概念であります。あるいはまた思考様式の範例・見本例であると要約されます。クーンによれば、科学の進歩とは既存の

パラダイムによって説明できない事象が増加したとき、それらを含めて説明できる新パラダイムに科学者が集団的に転換することであると主張しています。

パラダイムの転換は、物理学がもっとも早く、心理学や生物学・経済学がこれに次ぎ、第二次大戦後には文化人類学や地理学などが転換しています。地理学の革命とはこのパラダイムの転換のことです。17世紀にニュートン物理学は絶対空間と絶対時間を基礎概念として成立しました。1915年のアインシュタインの一般性相対性理論や1952年のポアンカレの相対性時空概念を基礎概念とする新物理学にパラダイム転換が行われました。地理学の時空概念はニュートン的な物理学の時空概念であります。哲学者イマヌエル・カントが1756年にケーニヒスベルク大学で「自然地理学」と題して人文地理学の講義をしたのが、アカデミック地理学の最初の講義でありました。カントは、当時すでに哲学者ライプニッツが相対空間と相対時間を主張していたのかかわらず、ニュートンの絶対空間と絶対時間を基礎概念として地理学の理論を組立てました。このパラダイムが最近まで継続してきました。しかし物理学において絶対時空概念は特殊な極限状態の場合であり、一般的には相対的な時空概念が適用されると言われています。地理学の革命とは古典物理学の絶対時空概念からなる旧パラダイムを棄て、相対時間と相対空間を結合した時空連続体を新パラダイムとして転換し、その上に新しい地理学理論体系を構築することです。

歴史地理学会は科学革命がひろがり、その波の上に乗って地理学の革命が進行していた時期に創立されました。歴史地理学会を創立せしめた最大の原動力は、この科学革命に正面から取り組む研究者の自覚と努力でありました。

III. 百花齊放の歴史地理学方法論の展開

(1) 実証主義的方法と人文主義的方法の発達

近代地理学の理論が改良された時期は2回ありました。1回目は19世紀半ばであり、2回目は20世紀半ばであります。1回目は地理学の研究対象である絶対空間の名称と性格づけであります。名称は風土からはじまり、環境・分布・景観・地域・地理的複合・空間的組織・地理的システムなどです。この名称のちがいでその性格も表面的には変えられました。それは絶対空間である土地空間の名称であり、パラダイムを転換しておりません。2回目はパラダイムを転換して相対時空に移行し、それを基礎概念としてその上に方法論を新たに展開しました。基礎概念の転換が行われたからこそ、方法論が多様に展開できました。これは真の意味の地理学の革命であるということが出来ます。方法論とは研究対象から断片的な資料を集めてこれを検証するために整序する理論です。方法論は大別して「ものから見た世界」を考える実証主義的方法と、「人間から見た世界」を考える人文主義的方法があります。実証主義的方法と人文主義的方法が人文地理学と歴史地理学の中でいかに発達してきたかについて、すでに学会誌・歴史地理学・143号（1988年・12月号）に拙稿を掲載してありますので、ここでは必要な限りに簡単に申し上げます。

実証主義は19世紀半ば、フランスの哲学者コントが体系的に論じてから近代科学の方法論になりました。実証主義とは人間の感覚、経験による事象を客観的実在として、これらの諸事象の関連（法則）を考える方法です。内在する本質とか、事象の本源的原因などは形而上学の問題であるとして科学の外におしだします。そして法則とは客観的実在間の関係であると主張しました。19世紀末にオーストリアの物理学者マッハは「世界要素

論」を唱え、世界は色・香・音・温冷・時間・空間などの感覚的複合が依存関係をなしていると分析して、科学はこれらの諸要素間の関係を最小労力で記述すべきであると主張しました。そのために諸要素を数量に還元して、この数量の関数関係をもって示すならば、これは精密化した近代科学になるという「思惟経済説」を主張しました。ここから計量主義が成長して、社会科学や地理学の計量分析法となりました。20世紀半ばになると、経験主義とマッハ主義が記号論と統合して新実証主義に発展しました。「世界における諸要素の複合には表層構造があり、その下層にはこれらの表層構造を通約する公分母があって、この公分母が深層構造となっている。さまざまな表層構造は深層構造の変型である」という構造主義的方法に発展しました。この構造主義的方法は社会科学や文化人類学に採用され、また地域性とか地域構造を追及している人文地理学や歴史地理学などのマンネリズムになっている状態を打破できる有効な方法論となっています。

次に人文主義的方法はいかに発達してきたのでしょうか。人文主義的方法とは人間集団の行為によってつくられた歴史や景観は、それをつくりあげた人間集団の観点から解釈して理解するという立場であります。人文主義は古代から唱えられています。古代の人文主義は「世界において人間とは自らの生き方を計画して、これをいかにして実現できるか、そして世界をいかに変革できるか」を考えて行動する主体性を持っている人間像を主張していました。中世にはこの人間像は神の意志によって抑制されました。近世になって哲学者カント（1724－1804年）によって神から解放されました。これはコペルニクスの転回といわれました。その弟子の風土学者ヘルデル（1744－1803年）はその著「人類の歴史哲学の理念」（1791年）の中で近世の人間像を強調しました。「諸民族の歴史は出発点が個性的である

が、一つの大きな目標すなわち人間の普遍性に到達しようとしている」と述べ、「人間は感情的・直観的・理性的であり、構想力をもつ創作の人間である」と人間像を主張しています。生の哲学を主張する現象学学者ディルタイ（1833－1911年）は現代の人間像を述べています。「人間とは経済人とか理性人とか、あるいは宗教人とかという人間性の1つの側面を強調している典型人から世界の事象を見ることは正しくはない。全人間性を統一している人間像から考える立場が正しい」と主張しています。

これらの人間像は、地理学の革命のために行動科学や歴史心理学や解釈学などの支援を受けて、新しい人文主義理論を形成して、人文地理学や歴史地理学の方法論を発展させました。従来環境論は行動科学によって環境知覚論となって行動人文地理学や行動歴史地理学となり、歴史心理学によって観念論的歴史地理学となり、現象学的歴史地理学が生まれました。行動歴史地理学は1960年代からアメリカ合衆国で盛んになり、日本においても認知地図の研究や絵図の解釈などを中心として盛んであります。観念論的歴史地理学は過去の人々の景観を創造した思考を再考察しようとする立場で、1970－80年代にイギリスに興りました。現象学的歴史地理学は1970－80年代にアメリカ合衆国において成立しています。この地理学の革命において日本から新しいアイデアを世界に提出していません。

(2) 地理学史にみる人文主義的方法と 実証主義的方法の発展

地理学史をみれば、歴史地理学や人文地理学の方法論は、実証主義的方法のみをあげ、人文主義的方法を取り上げずに叙述している著書や、あるいは実証主義的方法が主流であるような錯覚を感じるほどに、人文主義的方法を軽視しているように記述している著書が多いようであります。このような地理学史は

いずれも正しくはありません。地理学の発達過程をみれば、古くから存在した人文主義的方法は古代・中世の地理叙述の主流をなし、近世に実証主義的方法が成立してからは、両者が相並んで地理学を前進させているということが正しい見かたであります。近世以降の地理学が盛んな国であれば、人文主義的方法の地理学者と実証主義的方法の地理学者が相並んで地理学界に活躍していました。いくつかの実例をあげてみます。

18世紀の半ば、哲学者カントは「自然地理学」と題して地理学を講義しましたが、これは人文主義的方法による内容でありました。19世紀のはじめ、C・リッターは「一般比較地理学」(1817-59年)を出版しましたが、これも人文主義的方法による内容でありました。このころのフランスでは、哲学者コントが「実証哲学講義」4巻(1830-42年)や「実証精神論」(1844年)を出版していた時期であります。いまだ実証主義は科学方法論として採用されていません。

それから数十年をへて実証主義的方法は人文主義的方法と並んで科学の方法論として使用され始めました。地理学界においても、著名な地理学者はいずれかの方法論を採用して研究しました。ヨーロッパではドイツのラッツェルは実証主義的方法をもって「人類地理学」を著し、環境決定論を打ちだしました。同じ時期に隣国のフランスにおいて、P・Vブラーシュは人文主義的方法をもって「人文地理学」の名著を残し、環境可能論の代表者となりました。彼の「生活様式」とは彼の人間像であり、典型人ではなく、全人間性を表現した概念であります。20世紀半ばになると、ドイツにおいても・シュリーターは人文主義的方法をもって「文化景観の形態学」を著して景観地理学を主張しました。このときA・ヘットナーは実証主義的方法をもって「地理学—その歴史とその本質とその方法」を著して地域地理学を展開しました。アメリカにお

いては、バローが実証主義的方法からの「アメリカ合衆国の歴史地理講義」を著し、学生の賞賛をうけていたころ、R・ブラウンが人文主義的方法をもって「アメリカの歴史地理概説」の名著を出版しました。またD・S・ホイットルサーやR・E・ドッジは実証主義的方法をもって「占居系列法」という文化景観の系列理論を提唱したころ、C・O・サウアーは人文主義的方法によって「歴史地理学の将来」という名著を出版して文化景観を論じました。

日本において、大学に地理学講座がおかれて開講されたときから、実証主義的方法の地理学・歴史地理学が重視され、人文主義的方法の人文地理学・歴史地理学には関心が希薄でありました。そのため実証主義的方法のみが発達し、人文主義的方法は未発達の状態にとどまっていた。欧米諸国のように、これらの2つの方法論が並んで人文地理学・歴史地理学の発達を前進させていたのとは異なっていました。日本では近代化のはじめから変則的な発達をしてきたのであります。

(3) 地理学の革命から人文主義的方法と実証主義的方法の発達

20世紀半ばから進行している地理学の革命によって、人文地理学・歴史地理学の方法論が飛躍的に発達しました。パラダイムの転換によって絶対的時空概念から相対的時空概念に取り替えられ、この新しい基礎概念の上に人文主義的方法と実証主義的方法は、新しくしかも多様に構築されました。実証主義的方法には計量分析法と、構造主義的方法が出現しました。人文主義的方法には知覚環境論と観念論的方法と現象学的方法が出現しました。これらの新しい方法論はそれぞれ実証主義と人文主義の伝統的な性格を持ちながら、研究者と対象との関係や獲得する知識の性格の違いなどをますます明確にしています。

実証主義的方法においては、空間の中の客

体と客体との関係を客観的事実として観察します。研究者は客観的事実を空間の外部から観察しています。そこから獲得する知識は経験主義や構造主義ならば、それは具体的知識であり、計量主義ならば、関数関係の抽象的知識であります。人文主義的方法是景観を表現し創造した人々の主体性に向って研究者の主体性が対話し、その景観を内部から解釈し理解します。そこから獲得する知識は過去の人々の知覚的知識や過去の人々の考え方・創造のしかたについての理解的知識であります。

欧米各国において地理学の革命が進行して各国の学会誌に掲載される論説には新しい方法論によるものがしだいに増加しています。日本においても、1970年代から新しい方法論による研究発表や学会誌の論説や著書の出版も現われはじめました。この中には実証主義的方法とともに人文主義的方法によるものがあることは注目すべきことであります。私は1977年に「歴史地理学方法論」(大明堂)を著わして、その中に「歴史地理学の未知の大陸テラ・インコギニタを探検する扉は開かれた」と述べました。この時期は新理論地理と行動地理が出現した段階でありました。これから10年後の1987年に「新訂・歴史地理学方法論」(大明堂)を出版しました。これはこの十年間が地理学の革命がしだいに高まり、次々と新しい方法論が提出されたことに対応したものであります。

地理学の革命は進行してすでに第一段階は終り、今や第二段階に入ったということができます。第一段階はいろいろの新方法論が出現し提案された時期であります。それは1980年ころで終わります。その後1980-90年代はそれぞれの方法論が普及し、その方法による具体的研究が行われ、それぞれの方法論の深化が進み、その理論の長所・短所がわかり、それらの盛衰も表面に出てきました。計量主義的地理は個性記述の地理に対して法則の定立や理論の組立やモデル構築などで目をみは

らしたものであります。あまりにも抽象化した知識の生産であります。これは右にふった振子を左にふりすぎた感があります。研究者にとってその成果はなにかわびしさを感じさせて、今日ではやや下火になった感じがします。これに対して構造主義的知識は個性も普遍もとらえ、個から普遍に至る考察過程はバランスがとれているので、研究者に好まれる方法論として発達すると思います。人文主義的方法においては、行動地理は研究が進行するにしたがって説明困難な問題にぶつかっています。環境イメージ(認知地図)の研究は進歩しましたが、景観・地域を形成する力が環境イメージであることを説明することが困難であります。また観念論的地理は過去の人々の歴史的理性が景観・地域をつくったという仮設の下で研究されています。しかしその解釈が正確であるか否かを確認できません。そのためにはドイツのマックス・ウェーバーが主張した理念型が必要であるという忠告が出ています。

IV. 研究者の方法論はいかに変わっているか

(1) 緩慢な変化

地理学の革命がいわれてから既に50年も経過しました。日本や世界の研究者はいかに自己のパラダイムを転換しているのでしょうか。それは遅々たる牛歩ぶりであります。アメリカの場合を見ます。計量歴史地理学や新理論地理学の論文発表は1965年には年間発表数の約10%になり、1970年に約20%にまで増加して、その後は10%以下に減少しました。これは新しい方法論が次々と出現したからであります。次に行動地理学や行動歴史地理学についてみます。この理論は1940年代に成立しました。それから30年後の1975年に「ポートロイヤルの海からのイメージと陸からのイメージ」という論文をF・K チャールズが発表しています。その論文の「はしがき」に「誰もこの方法論で発表していない。これはその資料はい

かなるものか、いかに考察すべきかについて自信がないからであろう。私は行動歴史地理学の最初の論文として発表する」と記してあります。

日本ではどうだったでしょうか。歴史地理学会の創立は地理学の革命を強く意識していました。常任委員会は紀要の発行を企画して、第1巻は「歴史地理学の本質と方法」を1959年に出版しました。この紀要には新しい歴史地理学の方法論が満載してあると誰でもが思いました。しかし開巻してみれば、新方法論を論じた論文は1篇も掲載されていませんでした。その20年後の1979年に「再び歴史地理学の本質と方法」を紀要のテーマとして論文を募集しました。今度こそはと開いてみた会員は期待をうらぎられました。この紀要は創立20周年記念特別号でありました。この紀要には私が行った講演「最近の歴史地理学の動向」が掲載されてあるのみで、多くは内外の過去の歴史地理学者の理論紹介でありました。私の論文内容も「歴史地理学におけるパラダイムの転換を明らかにし、新理論地理学と行動歴史地理学の出現」を論じているだけでした。いまだに学会の紀要や機関誌に新しい歴史地理学方法論に関する論文がにぎにぎしく掲載される段階にはなっていませんでした。

新しい歴史地理学の方法論の普及が遅々とした進行ぶりの原因が2つあります。1つは大学に在職する歴史地理研究者が地理学の革命がはじまったことを知っていても新しい方法論を研究したり、新しい方法論で調査する時間を発見できなかったことであります。2つは伝統的な歴史地理学の需要が大きく、その需要に応じて多くの時間をさき、新しい方法論を追及する時間が少なかったことであります。

1の障害条件を詳しく言えば、それは大学・高校の先生方はそのころに激しく起こった学生問題の処理に研究時間どころか生活時間まで削りとられていました。敗戦国の国民とし

て住宅もなく、食糧も少なく、インフレーションに生活資金も乏しくて、生きるために十数年間の努力をして、やっと調査・研究する時間の余裕ができてつあったころ、頻発しはじめた学生問題は大学運営上の難問題になってきました。私の場合を例にとってみますと、千葉大学においては、1958年に学生自治会が結成され、大学教授会との集団交渉がはじまりました。1960年に全学連を結成して学生運動はますます激しくなり1964年から安保斗争やベトナム反戦運動が起りました。その間私は教務委員長や厚生委員長を教授会から命ぜられ、教授会と学生の間にあって、紛争処理に朝早くから夜遅くまで大学の委員室につめて、教授会と学生自治会との交渉に明け暮れていました。私をはじめ委員の先生方は研究時間などはなく、講義時間までも学生問題処理にくいこまれました。このような状態は全国のどこの大学においても同様であり、歴史地理学会の会員の方々も同じような体験をなさっていたわけであります。歴史地理学会の紀要第1号にも20周年記念特別号にも、歴史地理学の新動向・新理論の論文を投稿できる研究者はすくなかったのであります。

しかし私はこの学生運動に期待と希望をもっていました。現在の大学の激しい変革運動のエネルギーは、将来において研究者となれば、地理学の革命をおしすすめ、歴史地理学を飛躍的に発展させる原動力となるだろうと思っていました。あのころの学生諸君は現在の50才代の年令層に当たります。歴史地理学会においては学会の主要勢力を形成しています。この50才代の年令層はかつて持っていた変革のエネルギーを何時になったら科学革命に爆発させるのでしょうか。私はその爆発を今か今かと待ちつづけています。

私は教務委員長や厚生委員長の役職をとかれて、他の先生方に渡してから、ようやく歴史地理学の世界の動向はいかに進行しているかを調べる時間の余裕ができました。また

1967年に文部省から新設の筑波大学の大学院に配置転換の辞令を交付されました。私は大学院に日本最初の歴史地理学の博士課程を創設しました。こうして研究体制も整い、私は教育と研究に専念することができました。

阻害条件の第2は、わが国の学校教育における地理教育の学習内容であります。この学習内容は小学校・中学校・高等学校の12ヶ年にわたって「日本の諸地域」と「世界の諸地域」を繰り返して学習します。これは日本や世界を多くの地域にわけて、地域の個性・特色を学習することを意味します。これは地誌学習であります。つづいて「全体としての世界」と「世界の中の日本」などを学習します。これは系統地理学習であります。これらの学習内容を通して国土認識と世界認識を与え、多くの地理的見かた・考え方を身につけさせることが地理教育の目標となっています。

日本の地理教育は、ヘットナー・ハーツホーン流の地誌・系統地理を学習内容としています。この地理的知識は旧パラダイムによる知識であります。またその方法論は実証主義でありますから、知識の性格と地理的見かた・考え方は実証主義の影響を色濃く押しだしています。また地域の個性を学習することによって学習者に国土観を与え、国土愛を養成しようとしています。この方法は地域の個性を過度に美化する傾向が発生しやすく、戦前の神国日本に進みやすい欠陥があります。また実証主義的方法にひそむ思想の影響にも警戒する必要があります。コントの実証主義的方法を産業革命時代やヨーロッパの列強の帝国主義時代に適した思想に発展させたのは哲学者スペンサー（1820-1903年）であります。スペンサーは生物学者ダーウィンの生物進化論を利用して社会進化論を実証主義に加味しました。それは適者生存によって生存競争に負けた弱者は排除されるという社会ダーウィニズムであります。これはヨーロッパの列強の資本主義と植民地政策を正当化して帝国主義

を是認する論理・思想であります。実証主義的方法による地理的知識や見かた・考え方が地理教育の学習内容の基底にひそんでいると言え、誠に時代遅れの学習内容といわざるをえません。この学習内容は文部省が制定した社会科・地歴科の学習指導要領によって規定されています。民間の教科書製作の会社は、この学習指導要領にもとづいて教科書を製作し、販売しています。

したがって教員養成の大学の地理教育は、旧パラダイムの地理学習ができる教員の養成をしなければなりません。この事情が古いパラダイムが頑強に生きつづける最大の原因となっています。これからの地理学科の学習内容は新パラダイムの地理に移行し、実証主義的方法から生ずる弊害を除き、人類の理想を高くふりかざしている人文主義的方法の地理的知識をもってその見かた・考え方を育成できるように改善する必要があります。

(2) パラダイム転換の形態

研究者は旧パラダイムから新パラダイムに転換する人々が次第に増加しています。転換のしかたは4通りあげられます。

1は不動執着型であります。地域の特性記述の面白さにひかれて旧パラダイムに固執して新パラダイムに関心を示さず、地域性叙述は今では観光案内文にすぎないと悪口を耳にしても熱心に地域の特色を調査している研究者であります。確かに地域地理学は古代では帝王の学といって支配者が自分の領土の現状を知り、中世・近世には貿易商人が必要としていた市場調査書でもありました。かような効果はいつの時代にも大切な地理的知識でもあります。これら新パラダイムによって考察し記述すれば、もっと優れた内容になることに思いを致すべきでしょう。

2は電光転換型であります。研究者が研究思索中に、あるいは講議中に、あるいは景観を見ている時に、突然に電光の如くひらめい

て、古いパラダイムから新しいパラダイムに転換したという人々であります。突然に地理的見かた・考え方が変わった瞬間があったのです。常日頃から旧パラダイムの欠点を意識して研究している人々によく見られることであります。この天才的な研究者は理論の新展開によく貢献します。

3は納得転換型であります。古いパラダイムでは説明・解釈できない地理的事象にたびたび直面し、それを解決するために悪戦苦闘をくりかえしてのあげく、新パラダイムを適用してみてもうまく解決したり、あるいは地理学史や地理学原論によく親んでいて、古いパラダイムから新しいパラダイムに辿りついた人々です。このような人々はおもっても多数をしめて、理論の深化に役立つ研究者であります。

4、自然成長型です。これは最近の大学卒業業者の中に多い人々で、はじめから新パラダイムだけを知って旧パラダイムはすでに彼の地理学史の中におしこんでいる人々であります。この人々は新しい歴史地理学の理論の形成に強力な前進力となるでしょう。

V. 私の歴史地理学界に対する希望

時間が残り少なくなりましたから、最後に日本の歴史地理学に対する私の未来的希望を申しあげます。それは研究者が自分の中に自分なりの歴史地理学概説を持つことであります。自分の研究問題をつねに自分の概説の流れの中に位置づけていくことが大切であります。もちろん他の研究者の研究も吸収して、自分の歴史地理概説の内容を豊かにしていきます。やがてはこの概説が著書となって出版されます。世界において自国の歴史地理概説を持っている国はあまり多くありません。歴史地理概説を出版されることは、それぞれの国の歴史地理学の発達段階を示す1つの指標であります。日本・アメリカ合衆国・中国・イギリス・ドイツ・フランス・オランダなど

は持っています。それは1つの歴史地理観をもってその国の歴史地理的变化をはじめから現在の直前まで叙述できるまでには、詳細な研究成果が蓄積していることが必要であるからであります。国別の歴史地理概説は、その諸民族・国民の生活圏の発展と変化が中心テーマになると思います。

さらに国別の歴史地理概説の段階から自国とその隣接地域を含めた広域歴史地理概説の段階があります。これはこの地域にふくまれる各国の歴史地理を同時代の時の断面に羅列して叙述した内容ではありません。広域歴史地理概説はこの地域における諸民族の分布をつくった民族の興亡も必要ではありませんが、各国別歴史地理概説は愛国心の結晶が多くあり勝ちでありますから、広域歴史地理の全体像の流れの中に各民族の活動が整合するように整理することが最も大切であります。広域歴史地理概説には地域の範囲が重要問題になります。ヨーロッパ歴史地理概説はすでにイギリスから出版されています。アジアの歴史地理概説やアメリカ大陸の歴史地理概説やアフリカの歴史地理概説などが待望されます。広域歴史地理概説は国境を越えている過去の人文地理的事象の発生・拡大・伝播・盛衰などの地理的变化が中心テーマとなります。最後の段階は世界の（人類）の歴史地理概説を展望できる段階が考えられます。世界歴史地理概説は世界の強大民族の興亡史や広域歴史地理の要約を羅列した内容ではありません。世界歴史地理概説書をひもとけば、人類は多くの個性的民族にわかれているが、歴史のはじめから同じ方向に向って、あるいは遅くもあり、あるいは早くもあるが、人類の普遍的方向に前進しているすがたが叙述されていると思います。以上の各段階の歴史地理概説書はそれぞれの次元にあつてカテゴリーを明確に意識して目標を追及して叙述すべきであります。地域的広がりの中で同じ時の断面上にさまざまな歴史地理的事実をよせ集め的に羅

列して、国別歴史地理と広域歴史地理と世界歴史地理はその内容をカテゴリー・エラーに陥らぬように注意すべきであります。そして全体を通して歴史地理の一貫している目標として、「人類はいつこから来り、そしていつこに行くのか」という永遠に追及される課題に

対する回答の1つとなすべきであります。

私の特別発表は既に発表した論旨をくりかえしたり、むかしの論文の煤を払って持ちだしたりしました。長時間にわたっての御清聴を感謝します。